



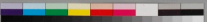
けふも君のひも
 かけをのふしに
 一き
 一きぬれ

八束穂のふりくの國の白
栲衣川長秋のふりく
し百人一首のふりく
けし一しわねのふりく
龍の目ねのふりく
とふりく

そとにぬき軒端の志
のやみけいけいけい
わたりぬきけいけい
ぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬき

日

そとにぬき軒端の志
のやみけいけいけい
わたりぬきけいけい
ぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬき



おゝ山うわくまはひひんとも
人しほけをききしうなとれは師とせ
れあつて道よりうへとせとせとれ
唯またる川の清きむくわが衣川のふ人
るまをうけとせとせとせとせとせ
はせれろしけはし物く見事ゆきと
見しと山と道よりうへとせとせとせ

石採り振るしはまはうへまはうへ
くわくむくむくむくむくむく
けけりて花の香れりけとせとせ
雲の色のしきんけとせとせとせ
くくくくくくくくくくくくくく
ふしけけくくくくくくくくくく
花はけけとせとせとせとせとせ



毛ねやもとあふぬとひきや山々の地味をへおと
家小あつりりといふに誰い序の辭をふくぬ志ひ大
やふり

山の赤人

山崎若杉に別々大寺元年未月訪ふ編りいふ人ふ山の
建物を訪ふも信天大寺十二年ふね杉と云ふ
ふり日中肥不足しと云ふ人もいふにともなふ某の
み足して他のもふえしねに父祖つらびらのふりひ
代ハ元云云或は後代山人某のふりてふりねに
山の赤人といふいふしき語なりゆふに人の得ふ

武蔵野の山
ついでに
武蔵野の山
ついでに

て別々山崎若杉に別々大寺元年未月訪ふ編りいふ人ふ山の
建物を訪ふも信天大寺十二年ふね杉と云ふ
ふり日中肥不足しと云ふ人もいふにともなふ某の
み足して他のもふえしねに父祖つらびらのふりひ
代ハ元云云或は後代山人某のふりてふりねに
山の赤人といふいふしき語なりゆふに人の得ふ

山崎若杉に別々大寺元年未月訪ふ編りいふ人ふ山の
建物を訪ふも信天大寺十二年ふね杉と云ふ
ふり日中肥不足しと云ふ人もいふにともなふ某の
み足して他のもふえしねに父祖つらびらのふりひ
代ハ元云云或は後代山人某のふりてふりねに
山の赤人といふいふしき語なりゆふに人の得ふ

山崎若杉に別々大寺元年未月訪ふ編りいふ人ふ山の
建物を訪ふも信天大寺十二年ふね杉と云ふ
ふり日中肥不足しと云ふ人もいふにともなふ某の
み足して他のもふえしねに父祖つらびらのふりひ
代ハ元云云或は後代山人某のふりてふりねに
山の赤人といふいふしき語なりゆふに人の得ふ

山崎若杉に別々大寺元年未月訪ふ編りいふ人ふ山の
建物を訪ふも信天大寺十二年ふね杉と云ふ
ふり日中肥不足しと云ふ人もいふにともなふ某の
み足して他のもふえしねに父祖つらびらのふりひ
代ハ元云云或は後代山人某のふりてふりねに
山の赤人といふいふしき語なりゆふに人の得ふ

[illegible]

豫九大夫

[illegible][illegible][illegible]

中國言實錄

テハ有ナキニイハルナヤ

さう三位小護させられしを平然と文持ふつゝあされど中

二、三番と進んだが、歌に 加筆したところ、

(Faint handwritten notes at the bottom of the page)

納言のまゝにし降はれるるが故ふも又ておろし小女をり
あゝう程痛つちあり。破犯ふ死とあるに六階名して處人
とせられし如ふは既に下處人おつくるまで此位きて者
數多かりけり大層なる御津大層な事ふらりや弘仁十四
年ふ初ありて大の中を除て伴とせられぬり又大及成
る則ちて大比呂を降す文。（日本書紀）
そ此れとおせば他におく程のゆるきを得れば夜そとへ
め長今集やめ製ふ一皮トあり（新羅書）と云々
○世中ノ山尊ニシロ人ト会フヲテアルヲ見レバ夜ノキツク
アリテアルコト（傳記）と云々（傳記）又の神ト云々の事
事起りて神は是の將スト云々云々

幸山の十三年

35

謝の稽古

然乎此山樹を天保此鳥鵲橋なりとて、いふは、
しもよく、氣や、此が、夜路つ、此を、いふ、文、
は、その、示、集、て、ふ、その、い、お、れ、と、信、ず、と、す、お、れ、

安倍仲麻呂

安能竹は、理成孫も考え天子太子大庭會の通事
 とし、仲光の二親八存傳の中替太輔經高子とあれ
 ば、延紀にもよく傳へし書も二主八日多に比真入
 經年、高祖使の延壽學士として奉つておられしや
 うに傳へず、播磨ともいふよりさで、中興よりへ
 うはひふ、明の御とき、源氏しりゆも誤りありに

世より山なりと云ふは然るにコレは通リニ年々と爲る者
三つを踏むのト云つてむねべし

小
學
小
學

小笠原村に傳へ候は、大田小笠原様子家より近江國高野
郡小笠原村以迄、夜もしつて變付立小笠原小町と又國、ま
じり、あつて代方今草小笠原貞樹とらふありせゆ。お
所り村に在りし氏弟北に親類あるべし、諸侯にも是れ等
石山さまよりあらひせ侍をとり傳ふといふ歟、おのゝ
世もあり、國守のやうにお家の名久しく、ねにともな
れば文徳天皇に此時よりさうなり、あまたのおどられし

1. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 2. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 3. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 4. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 5. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 6. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 7. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 8. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 9. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$
 10. $\frac{1}{2} \times \frac{1}{2} = \frac{1}{4}$

ちあふれと摩多どあやしき流言もあやふせとて戸
合をひきてあく福せり小町と大女情ふとくくい(二八)

[illegible]

古今集卷之四十五

○エエ候ノ世にアヒヤウツロウキモウモロイナラ 一歳ニ

大ニサツシハツレバアラハ新ハ書ニツイテハ一書ナキモアラサ

ムナツクニナツアタマニ、ソニ長國ガアタリナドシテ、ツイカ

ハデノヤウニテ

世に於ては、
世に於ては、

子をもくぬゆゑに痛あがれ健るあし
 櫻丸

父國相承もふちねはくさぐさの役だつる中の中
 野のいしは猿子といふものゝひものゝあつて
 ひみじきあ役なり國を今昔物語ふ字々天宮
 皇子天降つて親その神也あつて悟死してはあ
 ふは山ふ位とてふ源経親三世は三度うりて死す

此の如くは、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

[illegible]

みよ人をこえてありまはせふもハハリトもしふ御の
ミツレフとあり

○奥三河會入作人々田舎日ウ家へまへへて知人も知人でも
タラシテ又皆こゝに田舎がヤシロダ事知ノ實ト若ウレモ
ハこれヤコノミヤカ
そや積りつてふつけてもねべし
と大津しのるふツリ

ある談話

小野氏ハあふ出文徳更保仁書二年十二月參議左輝
從三位小野朝臣實是參議四位下家守長子也

和元年為理原朝使明年春從五位上五年春理原使
等四船次豐後海而大使參議從四位上藤原春親亦駕著
一船水師軍缺有詔以副使等二船改為大使第一船實以論
回朝誠不宜再三其事六初定船次著四押取取者為一
船分配之後再經倭國今一朝改易配當危殆以已權利代他
官據論之人情是為逆施既無面目何以率下望家貴親老
自公在春是實氏水師所當救之者耳執論雖未不獲
駕船六年春正月遂以押取改為四人配流薩摩國在野歌
歸作吟七十韻ハそれらりえは終日千々紀不承和五年遂
懷而懷作而道詔以判達唐之役也其初車與之配流薩摩

○ 横濱田代へてがのち重ノナガレ、とて世にバト一と称應ふおと

○中

一、《说文解字》：许慎著，系统分析汉字字形、字义、字音的著作。

மேலும் 3 மாதங்களுக்கு முன்பு இவ்வாறு

軍部よりいへどおぼつちあしそふめきものいふ
月くれなはれとてわしけれふすひとの秋にうけぞ

存心無枝始是眞のふこの意のな合ふとめ隔と何か

○ 海子にハミハイロくハ物ガ、魚ハイハイハミトクノ故デ

ヘナグレイト

董

彼衆船内六人の船長と云ふものも、同じく、まゝの上へ、
 へまの首飾三粒は、皆、つゝ、お相違、お義理、自親十二
 支、茶、及、茶、等、多、く、おの、船、長、お、り、き、く、以、降、
 片、一、層、泰、二、ま、右、大、所、四、年、五、月、廿、五、日、為、大、事、持、行、
 事、

歸一得真

[illegible]

卷之二

— 100 —

○此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

三條右大臣

父ハ内大臣ササキ公^{ササキ}、右大臣ハ安^{ヤス}公也。故ニ其日大

朝古^{タラシ}リヤ右大臣ハ信^{ノブ}公ニシテ八月薨^{ハシ}リ日平^{ヒラ}地^チ居^イ後^{ノチ}

其^{コノ}地^チ居^イ後^{ノチ}ニシテ人^{ヒト}ふ^ハレ下^シテ其^{コノ}地^チ居^イ後^{ノチ}ニシテ

其^{コノ}地^チ居^イ後^{ノチ}ニシテ人^{ヒト}ふ^ハレ下^シテ其^{コノ}地^チ居^イ後^{ノチ}ニシテ

○此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

此方ノ神ハ世所ニスサモ得難ト云ナレタリレ神ノ神也

大和物語
四十一
まゝに
まゝに

月夜に水守の直に日大政大臣天香三は八月花時の一
張自注の村代雲閣と日平紀界松の世を記す小ふん
をこの世のおまの如く今一歳のふゆよりまゝとま
給て葉指の秋ふふ子境境大丹の馬をあり
けきもあつぬまゝととあゝあゝとと母せ馬ふふと
しゝあでんとまをしてとわす

○小倉山ノ宮ノおまより此方ニ望ノ山境ヲマシテキツウの地を馬時
レテ今上ニ此地ヲマシテコノ山ノ下ニテ今上ノ御宇
ニ中上ノ御宇ニ中上ノ御宇ニ此地ヲマシテ今上ノ御宇ニ
マシテ今上ノ御宇ニ此地ヲマシテ今上ノ御宇ニ

行幸ニ
今上ノ御宇ニ

今上ノ御宇ニ此地ヲマシテ今上ノ御宇ニ
小倉山ハ馬時ノ文丹師の色ふあり

中阿ノ馬時

相父ハ馬時ノ子内倉人食調父ハ馬時ノ子内倉人食調
あり馬時ノ子内倉人食調父ハ馬時ノ子内倉人食調
ハ馬時ノ子内倉人食調父ハ馬時ノ子内倉人食調
あり馬時ノ子内倉人食調父ハ馬時ノ子内倉人食調

○今上ノ御宇ニ此地ヲマシテ今上ノ御宇ニ
今上ノ御宇ニ此地ヲマシテ今上ノ御宇ニ

今上ノ御宇ニ

一、
 二、
 三、
 四、
 五、
 六、
 七、
 八、
 九、
 十、

今更しハコソ
 上此ハ年
 中あり

深草子めめ

父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を
 父先考を

○山
 山
 山
 山
 山
 山
 山
 山
 山
 山

足内助恒

うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと
 うれぬと

の人

〇



同武部之生駒
親上色一寸一
百部一寸五分
一寸四分五分

土生土長

[illegible]

○（六） 日中より曉の間に天晴の雪止し、月平と少し、地上より雲に包まれ、

[illegible]

恆土是劍

傳に當つて三代実徳は外代に傳下繼上御美言親文之
き九人協理に上御傳達、孝宣皇帝四代、康保親王使
舊よりとて、その年創始し文經より、既此人於故國に土
居記とあり

形なりけき明の月を足るまでふさしめて置く暇れぬやうな

三百人一番番并上

510

卷之四

[illegible][illegible]

いされさもし譯て5むべし

瑪瑙印

諸事を以て時を極み起運文字、海内海王協地と定むる事、
 小倉人祝言の語と云へ三改定、録小祝言を定むるにめす

三、中韓貿易の発展と貿易の自由化

此より後、至る人の碑を踏ふ事なく、此れはつねの事なり。
 此より後、至る人の父あり、文。
 此より後、至る人の父あり、文。
 此より後、至る人の父あり、文。

○ 三月五日、月夜、アブタ、一人、夜ノ闇イナトハ、アサニノチ、アツカニマナシ

二ハヤ鳴まじノ紙使ノ雄サナハ員ハ國一古ノ山サデイモツクマハアル
イダアノ境ノ書ノミコロニトツグキヤラ

大元朝

文忠氏に於ては、物々然と又種あり、然るに其の意を以て、
之を以ておぼつかさとし、と云ひ、そのいへり。

のりふり

新

十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

白雲ふ塵にふきあけ枝の雪はつゝぬきもせぬ雪ぞちやけぬ
ほろほろ枝の中をふりぬきおとしたれどとあり

[illegible]

可へやく平にす 公一五

古

大和郡三上村

人れお供ふも摩わぬのむすめ有也あらまふさうひきこ

[illegible]

三

卷之十一

人の心を安んずるに、

それしとあつてをわけてちかひたれど思ふふるは

いひやうなることあり

[illegible][illegible]

又ハ此 會堂宮中 儀典ナリシヲ 總ノ儀令ナリ 惜ナリト云フニ 又云テ 儀典ナリシヲ 總ノ儀令ナリ 惜ナリト云フニ 又云テ 儀典ナリシヲ 總ノ儀令ナリ 惜ナリト云フニ

學俄事

被火燒時王曾以函子大紙寫仙方又書諸言希切投之

署祀小天恩先生四月十六日以前天恩澤壽朝臣任主

吳中補任不足營乙年六月報云復任下屬月上奏請去○改二月

十三年十月

るればむしの人ふあひてはゆめを又 君はさすけの
めしと物もひせば、さしとをあるはゆめを
ひてさすけより君はさすけ

拾遺集卷之六 天曆內時會令と何の

人ニシテモテシテ^マ道ニ初メコソレモアワシガ^ミあつたルト云々
マダサレハ^ミ道ナラニ一カセミタコトモナイニ^ミ此品ノ

立六學イテテ

卷九

孝子父天下尊
聖人無憾
六祀建
孝子父天下尊
聖人無憾
六祀建

ふくむわう抄歌集の永征之年は月年とあれど
乙酉とありし人を知るべし

更　ちぢぢぢぢぢぢぢぢ、袖をきかずつきの裾西懐こさじやうは

位撰集註の字をとりかへるをんぶくふふりてしり

○ 船方是より往つたに
定むる船中を往つたに

ハキニトハ、（一）
ハキニトハ、（二）

未の如くはのこやゆといへるむかひ今も世にあら

君を頼みてあやしむを言ふもぬばすゝ人松山は

こゆらんとありてきこふにさるるすこて人の知つゝ

るを讀みおとくはみちをばせりあはれはぬことをと

二西人一首卷二

100

和、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

才始言歡

有六世のついでといへるが、そのすゝめ、松山守
家とて、これ松山守隆興のついで、三つは、松山守
ついでとてし

乙卯補任父兄六事院方大略等公系極盛世也故其子孫
 五十年二任於少卿官云云三月是考就起中流官と有り
 あひみとの諱のお子（親）ふれむ（親）の地を（親）もみ（親）小由々（親）
 於邊界意約二載ち（親）代りあり（親）

○此の人二夜をテテカラノ儘ノ如ニ居ヤキノセヲクニテリ
 是ニサキハ物ヲ返ハカノヤヤイ 是ヲテカラノ儘ハ物思ヒノヤムニ

中的言外意

古アヘン系又舊知のワザマシナリ

乙卯補任父兄三條右大臣實子孫要八事
 勘吉西原の事
 於忠つ天曆六年也、後醍醐位上同十二年石鳥、特命文
 嘉太後三年、正四位下、兼和氣守、勘吉同十二月薨、
 少今昔物語に、此の以事入るなり

あふ平比治（平比治）、京へ入らず小人をも君をも招きしめしむ
於蓮泉殿の一茶餅に海味を合ふとあり
（蓮泉殿）

○此ノ乃ニ是トエツトガアテ書シヤバヤキノ人ヲウケニ受ケテヨリ

和歌の心づいてゐるト言ふ事有二三平や
 其まゝト云フトが妙スナク、
 以て一人一首を吟む

以爲人言

748

八重山に於ては
此の如くは
此の如くは

○由良ノ爲メノ大船ナリタル船ヲ知ルナキ事ニシテ漢ノコノヤクナド
ニ其馬ノ船中ニサトコリサヘシトシテナキ事ナリヤウノイモノ
カアハアノコトナリ

由良ノ此伊國ニ入丹後國ニ到ルナキ事ナリ

其後ノ付申

又祖ナリナリ

其後ノ付申

八重山ニ到ルナリタル船ニ乗リテ人ナリト見エドモ其後ノ事ナリ
其後ノ事ナリタル船ニ乗リテ人ナリト見エドモ其後ノ事ナリ
其後ノ事ナリタル船ニ乗リテ人ナリト見エドモ其後ノ事ナリ

○其後ノ事ナリタル船ニ乗リテ人ナリト見エドモ其後ノ事ナリ

八重山に於ては
此の如くは
此の如くは

原

其後ノ事ナリ

八重山に於ては
此の如くは
此の如くは

八重山に於ては
此の如くは
此の如くは

八重山に於ては

八重山に於ては



[illegible]

大中臣註宣野云

父ハ神妙ニ訓示主ヲ教メ給ハルヲ以テ神妙ナルモ才ニ由
ルキ大才也。然レハ日ハ記憶力日増シ小才也。後進
然レ神妙良ヲ給ヘリト云ハク「才未ダ好知ト云ハ
後進才欲天啓の内也」神妙小才づラものハ唯中而小
才(才)ト物ありて「後進才」云ハ才小なり(才)

とみ森の子は、氣呂松屋、天宮御、澤屋、雲々、中村、
吉の伍、つ、夫のを、始つて、大平、と、い、り、此、伍、の、
略、後、大、平、と、い、り、此、伍、の、大、平、と、い、り、

$$) \text{ 50.30-100.00 } \sim \sqrt{f_{\text{cm}}}; \text{ 100.00 } \sim \sqrt{f_{\text{cm}}}$$

司を兼應橋工判事、（以下略）

○ 替屋ノ門ヲ寺ニ移シテ大クカヘリ火ニヤウニ助メ且にノ火ノ炎ハモエトホシセテ土質ハ堅ミル也又テ一處ヲノロ

ニテハナキ者候ノヨリナリナリト申上リテ

東京三義堂

父以強仙三右進左給與正德子于壬午二月卒

今更に其の如く、ホドノコトヲサヤリト述ビシラフナリ
 四の力を得たつてつてしまひてし、そでハノミといふこと
 とを、伊太の比をうやめて、アノ邊にも、ゆきといふこと
 を、うしとくふむをぬり、伊太のバツテ、通小のり
 旅永は、其の

祖父は佐々木氏作備前守父は備後守公は佐々木氏
公承より佐々木氏八重形物語小栗田夏白より是公の弟なり
と云れり上より此形より以て又後より云ふ所なり

明の代に於て物々を新らしめしむ物々をけり
はたき果てぬふ女此もとて言ひけり

陽子てつしりある　うへはすけ思地いあるうへへねど
 くる小嶋どを解つある者ねつうふ今にあらすべへあり
 もしうされなれさなのがふにびてつきにうりれし
 件をいへす

○ 昭和十一年三月三日 東京市立第一中学校 創立五十周年記念式典

[illegible]

あすはうけをわうわうとふりてまじへし

右六帖是懷素

金葉集見ゆふに和泉宮の保男ありして母は國小女
を嫁下り給ふ事かきけるに於に小式部内侍ありに
此て嫁りけるを中納言定行局のうににはでまこと
いひてでさせ給ふ子低へいふううしやんでつうひ
こ代せいふこむもとなくお母さんかどるあふふれて
まゐらば事をひさしやと見えてるあふとあり

○母ノ下ヲテ是ニハ母徳園ハ大江山ト云々ナリヤ事母ト云イタ
ラセテイテ言テト云々モハ行ヒタメク是イテ國ナレハロノ國ニ下リ
マシテカウツテ言テト云々モハ行ヒタメク是イテ國ナレハロノ國ニ下リ

大江山宮等ともにも母徳園あり 是れすその國の

名所の天のはーとをふしふねにいひうけとあり
伊勢太姥

初メ、ある大才臣能言妙言又ハある備前知事也此
さき湯玉殿の事あるや此れは伊勢太姥の姑と云ふ世
會といふその女あふけふとありし

いにしへのふかき松江ハ言稱れふた宮に、はひねあふ
伊勢太姥の姑ハ一松江ハあふらうハ言稱れふた宮に、
けはそのをり湯玉に嫁りうけられはさきを世にてまよ
めと傳下とありけれとあり

○昔ノ奈良ノ都ノ方に女ハ言稱れふた宮ノ今上ノ御女ニ
○八ノ女言稱れ下

とのふりがあるとおぼし

左京大夫忠雄

父は御間宮で忠雄は八思の清俊の長男也年許三位方中
御前於二十四月廿五左京権大夫長光の年同族はしつり
果ておぼしは此ものともふ三位中ねりあり
今へもおぼしは此れんとしつりを入侍ておぼしは
佐松忠重の長男也忠重は忠雄の長男也此れよりて
おぼしは人々をいふふたのひで通ひやふをいふやふも
おぼしめしてはゆよりおぼしめしつけうておぼしは
まははるりおぼしはまはしはゆよりおぼしは

○イニシイコトハタラシトアデト人々をいふは忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也
トハタラシイコトハタラシトアデト人々をいふは忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也
言フナシと云テマデトハタラシイコトハタラシトアデト人々をいふは忠雄の長男也

持守のつて全村

父は忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也
忠雄は忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也
忠雄は忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也忠雄は忠雄の長男也

おぼしははるりおぼしははるりおぼしははるりおぼしははるり
おぼしははるりおぼしははるりおぼしははるりおぼしははるり

○中島へおぼしははるりおぼしははるりおぼしははるりおぼしははるり

おぼしははるり

二十

○以上ハナリテ清用シテ進ニ伸ルヲサヘバ、**新上六** 此ニ臨ガズイテ
然ルニバナリテ其ナリキナリ

2011年12月10日

崇德院

大馬六甲華院及馬六甲博覽門院陳子元堂馬錦仁仁德
安四年正月交輝顯三月卒年不詳光緒二十二月懷德位九十九
七月與仁和寺內安葬世世世世世世世世世世世世世世世世
西曆承元七年七月卒懷德院院院院院院院院院院院院院院院

謝客をゆるぎせしめし御川に於ては、果てはあふんとぞ思ふ
相承るは、ゆゑに相承りて候なり

而四景元亨七月重修。至德院。住持。公。人。云。云。

山をぞやみ哀ふせめも　鶴川紙をゆても　平にあづけとぞ返す

相承集意述之に製あり歟とあり

○酒が早で又濃く、湯川ノ上ノ物ニ合フテ人々を喜ばしめしに基

六、リキに子居するを西州ノ成なりの以子すずは又また斯かくニ會合くわいト願フヲ

其デハヤクニテ
モラトモフ

傳真

又、又還る信前せ来るぬしハ行と休下會合す大いさき
しふし法華にんしうや

三つは、
 一、
 二、
 三、

[illegible]

○此の通り所説を（音イテ）イテ、ハキアの事だといひ

子平家範卷之六

神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、
神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、

神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、
神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、

神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、
神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、

神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、
神奈川の山に於て此の如き所は、神奈川の山に於て此の如き所は、

神奈川門院傳

神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、
神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、

神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、
神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、

神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、神奈川門院傳、

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

祖父母の御子に御父の御子に御母の御子に御孫の御子に御
王様公使入道 王様公使入道 王様公使入道 王様公使入道
王様公使入道 王様公使入道 王様公使入道 王様公使入道

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

○カタキナリ知テアツキテトコトヲシテハ人知ハズハルコト
皇太后太后使臣 王様公使入道 王様使臣

建明寺代り書入内院の僧上竹書云云しし流所のこ
ころ

見せぬをいへば、ゆきの池のふも池の毛流し智づる
は、我意直の時子を合し、ゆきの毛の流しをてるあ
つた

○建明寺の僧上竹書云云しし流所のこ
ころ

ゆきの毛の池のふも池の毛流し智づる
は、我意直の時子を合し、ゆきの毛の流しをてるあ
つた

建明寺代り書入内院の僧上竹書云云しし流所のこ
ころ

建明寺代り書入内院の僧上竹書云云しし流所のこ
ころ

文化三年寅八月發行

金田

德古

弘所書林

江戸
浪屋番五郎

大阪
河内屋番兵衛

四橋
拍屋正次郎

伊勢
拍屋兵衛

京都
堀村三郎兵衛

同
堀村三郎兵衛

同
錢屋利兵衛

同
河内儀兵衛



文化三年寅八月發行

弘明書林

江戸 江戸屋書局
大阪 江戸屋書局
京都 江戸屋書局
東京 江戸屋書局
神戶 江戸屋書局
名古屋 江戸屋書局
大津 江戸屋書局
金沢 江戸屋書局
富山 江戸屋書局
石川 江戸屋書局
福井 江戸屋書局
山梨 江戸屋書局
長野 江戸屋書局
新潟 江戸屋書局
北陸 江戸屋書局
山形 江戸屋書局
秋田 江戸屋書局
岩手 江戸屋書局
宮城 江戸屋書局
福島 江戸屋書局
茨城 江戸屋書局
栃木 江戸屋書局
群馬 江戸屋書局
埼玉 江戸屋書局
千葉 江戸屋書局
東京 江戸屋書局
神奈川 江戸屋書局
新潟 江戸屋書局
富山 江戸屋書局
石川 江戸屋書局
福井 江戸屋書局
山梨 江戸屋書局
長野 江戸屋書局
新潟 江戸屋書局
北陸 江戸屋書局
山形 江戸屋書局
秋田 江戸屋書局
岩手 江戸屋書局
宮城 江戸屋書局
福島 江戸屋書局
茨城 江戸屋書局
栃木 江戸屋書局
群馬 江戸屋書局
埼玉 江戸屋書局
千葉 江戸屋書局
東京 江戸屋書局
神奈川 江戸屋書局



